

## ぼくのお姉ちゃん

小五

ぼくには、中学一年生のお姉ちゃん  
がいます。お姉ちゃんは、障害しょうがいのある  
人です。小さいころ、耳のきこえもよ  
くなかったので、お姉ちゃんはしっか  
りと言葉を話せませんでした。そのた  
め、「つ」と言うと、「ちゅ」と言っ  
てしまいます。うまく言葉を発すること  
ができないので、友達に、  
「なんか、声変だよね。」

と言われることがあります。そのとき  
ぼくは、イライラしてしまいます。「お  
姉ちゃんのことを何も知らないのに。」  
といやな気持ちになってしまいます。  
勉強もぼくが教えることもあるし、時

計の読み方もまちがえることがあるけ  
れど、お姉ちゃんはお姉ちゃんなりに、  
がんばっていることがたくさんありま  
す。

例えば、漢字です。お姉ちゃんは小  
学生のとくに、先生と漢字を毎日練習  
し、ノートを終わらせることを決めま  
した。そのときから、毎日欠かさず  
やっています。卒業しても、終わって  
いないノートがあつて、それも毎日  
やって、あきらめずに最後までやりと  
げました。終わったノートを先生に見  
せにも行きました。

ぼくは、「なんでそこまでできるんだ  
ろう。」と思ったことがあります。日記  
も毎日書いています。音読も同じで、  
毎日何ページも読んでいます。ぼく  
だったらそれだけでつかれてしまうの

に、時間があれば、算数の計算などもノートに写して問題を解いています。他には、夏休みなど、長い休み期間中に、縄とびのいろいろな技にちょう戦していました。最近では、二重とびが、十回くらいやって一回できるようになりしました。何事にもあきらめずにちょう戦するお姉ちゃんは、本当にすごいなと思います。また、ぼくのサッカーの試合がある日は、

「がんばってね。」

と声をかけてくれます。試合から帰ると、

「どうだった？」

と聞いてくれます。点をとった日は、

「がんばったね、おつかれ。」

と言ってくれるやさしいお姉ちゃんです。家族をいつも笑わせてくれて、お

姉ちゃんがいるだけで、周りが明るくなりません。そんなお姉ちゃんは、ぼくにとっても家族にとっても、大切な存在です。だからお母さんは、お姉ちゃんの使いやすいものを選んだり、見やすくて分かりやすく、やる気の出るような工夫をしたりしています。お父さんもぼくもいっしょに相談します。家族みんなで力を合わせています。

相手のことを何も知らないで、人がきずつく言葉をかん単に言うのは、よくないと思います。ぼくは、自分が言われていやな言葉は、人には言ってはいけないとお母さんによく言われてきました。だからぼくは、どんな人にも平等でいたいのです。障害しょうがいがあるからといって、特別なあつかいをせず、がらんぼっていることを、応えんしていき

たいです。

そして、困っている人がいたら声をかけて、どんなときでも助けられるよ  
うな人になりたいです。